学校だより　第４号

加曽利中

千葉市立加曽利中学校
令和５年７月 14 日

「あなたが虚(むな)しく過ごした今日は・・・」

私は今年で教師生活 36 年になります。その間、たくさんの生徒たちと出会ってきたわけですが、その中でも忘れられない一人の生徒の話をしたいと思います。

その生徒は、私が初任校で出会った「シンゴ君」という男子生徒です。シンゴ君は生まれつき心臓に重い病気があり、検査・手術・治療の繰り返しで一年の三分の二以上を病院で過ごしていました。体の成長に合わせて何度も手術を繰り返さないと命が危ないからです。

私は一年間だけシンゴ君の国語の教科担任をしていました。先ほど言ったように、シンゴ君は一年の三分の一くらいしか学校に来られないのですが、学校に来たときは常に穏やかな表情で友人と話し、決して人と争うことなく、誰とでも分け隔てなく接していました。

授業や行事などは、自分のできる範囲でとにかく一生懸命頑張っていました。例えば体育祭は、当然すべての種目に出場できず、ずっと応援席に座っているのですが、同じ組の生徒に向かってひたすら一生懸命、応援しているのです。

一年の三分の一しか来られない学校での生活、友人と過ごす時間というのは、彼にとって本当に大事なもので、一分一秒でも無駄にしたくなかったのでしょう。

そんなシンゴ君ですから、当然、周囲の生徒も彼のことを慕っていました。それを物語るエピソードですが、ある日、シンゴ君の学級担任の先生が「ちょっと聞いてよ。さっきの時間、校外学習のバスレクの内容を話し合わせたんだけど『シンゴが来るんだったら、バスレクはシンゴの国語の教科書の朗読がいいな』『そうだな!!』『俺もそう思う!』ってなったんだよ」と教えてくれました。校外学習のバスレクが国語の教科書の朗読って初めて聞きました。確かにシンゴ君の朗読は上手でしたが、これはやはりクラスのみんなからシンゴ君がとても慕われている証拠だと思いました。

シンゴ君は中学校卒業後、通いやすい、家から一番近い高校に入学しました。

彼が卒業した年、私も異動でほかの中学校に転勤したのですが、その年のある秋の日、前任校の先輩から「シンゴ君が亡くなった」という連絡が入りました。

秋の夕暮れのお通夜の会場には、それぞれの高校の制服を着たシンゴ君の中学時代の同級生がたくさん訪れていました。中学当時、学年 9 クラス、360 人くらいの生徒がいたのですが、そのほとんどがお通夜に参列していました。

誰とでも分け隔てなく穏やかな表情で接していたシンゴ君のことを思いだして、先輩の先生と話していると、先輩の先生が「シンゴ君、わずか 16 年で亡くなってしまったけど、でも、人の何倍も一生懸命に生きたよね」とつぶやきました。

私は心の中で「本当にそうだな」と思いました。

あなたが虚しく過ごした今日は　昨日死んでいった者があれほど生きたいと願った明日

もう少しわかりやすく言うと

君がムダに過ごした「今日」は　昨日死んだ誰かが心の底から生きたかった「明日」

ということです。肉体的に精神的に疲れた時は休むことが絶対に必要です。でも、あまりにもいいかげんな生活になってしまってるなと思ったときは、今日話したシンゴ君と

あなたが虚しく過ごした今日は　昨日死んでいった者があれほど生きたいと願った明日

という言葉を思い出してください。

（夏休み前の全校集会放送で校長が話した内容の再編集です。）

〈部活動壮行会　7/4〉

体育館アリーナにて部活動壮行会を実施しました。

学校代表のユニフォームを身に着け、りりしい態度で大会に臨む気持ちを述べる選手を全校生徒で応援しました。

選手はもちろん、応援する生徒の態度も大変立派で、後半の部の各部活動紹介の VTR では、部活動の練習風景をバックに各部の部長が語る部活動での思い出、最後の大会にかける思いが、見る者の胸にしみじみと伝わってきました。

三年生にはそれぞれの種目で日ごろの練習の成果を発揮し、自分の力をすべて出し切れたというすがすがしい気持ちで大会を終えてもらいたいと思います。

一、二年生には最後の大会にかける三年生の姿・思いをしっかりと心に焼き付け「夏休み以降は自分たちが加曽利中を引っ張っていくんだ」という気持ちを持ってもらいたいと思います。

総体が終わると夏休みです。夏休みのしおりにも書きましたが「夏休みだからこそできることを、何か一つやってみた」と言える夏休みにしてもらいたいと思っています。